

『大無量寿経』における「自然」について

— 親鸞の読みを通して —

山田 恵文

親鸞は、特に晩年の和文の著作において数多くの「自然」を語る。そのため「自然」とは、親鸞晩年の特別な思想を表現したものと見て、内外問わず注目されることが多い。その際、第一の資料として親鸞八十六歳の奥書のある「獲得名号自然法爾御書」が用いられるが、私は親鸞の「自然」を正確に了解するためには、まずはその背景にある『大経』の「自然」を理解しておかなければならないと考える。

「自然」とは本来「おのずからしかる」という意味であるが、具体的に何が「おのずからしかる」のであるかと言えば、それは「自然」の語が担うところの『大経』の教説に左右されると言える。『大経』には五十六カ所にも及ぶ「自然」の語があるが、『大経』のどのような教説を担って「自然」が表現されているのか、その違いによって従来より「無為自然」「業道自然」「願力自然」の三種の定義がなされている。その由来は定かではないが、その定義に従ってみるならば、第一の無為自然とは「一切の衆宝、自然に合成せり」「身に灌がしめんと欲えば、自然に身に灌ぐ」「自然に聞くことを得ん」等というように、浄土の莊嚴功德を修飾している「自然」であろう。それは、いわば「ひとりでに」「おのずから」と訳すことが出来るように、因果を超越した浄土の莊嚴功德のはたらきを表現していると言える。また「自然の音楽」

「自然の七宝」「自然万種の伎楽」等とあるのは、浄土が「自然」の境界であることを示している。その「自然」の境界とは如何なる境界なのか、親鸞の自然理解を見てみると、「真仏土巻」所引の善導の『法事讃』を典拠として「弥陀仏は自然のようをしらしめんりようなり」と法語で語り、また「高僧和讃」で「信は願より生ずれば、念仏成仏自然なり、自然はすなわち報土なり、証大涅槃うたがわず」と詠うように、「自然」とは浄土の性質、即ち涅槃の相を表すものとして理解していることが分かる。つまり、「自然」は浄土が無為涅槃界であることを表す術語なのである。このように読み取ったところに親鸞の独自の自然理解があると言えよう。

第二の業道自然とは、「善悪自然」「天道自然」「自然の三塗無量の苦惱」等とあるように、娑婆世界において流転する衆生の相を表現する「自然」である。これは、三毒五悪段のみに見られる「自然」であり、善悪の業による必然的な因果応報の道理を表現するために業道自然と言われる。例えば、

吾語^レ汝^等。是世^ニ五悪、勤苦若^レ此、五痛・五燒、展転^{シテ}相生。
但作^レ衆惡、不^レ修^レ善本、皆悉^ニ自然、入^ル諸惡趣^ニ。

〔真聖全一〕四〇頁

とあるように、そこにはただ悪をなして善を修さないものは「自然に」悪道に墜ちることが説かれている。ここでの「自然」とは善悪の業による必然的な報いを表現している。このように三毒五悪段とは、娑婆世界において繫縛されていく衆生の相が描かれているのであるが、その中で「自然」は、因果応報の道理として表現されているのである。

さて、以上のように無為自然と業道自然を見てきたが、注目す

べきなのが無為自然の浄土の境界、業道自然の娑婆世界、この両者に挟まれた位置にある次の第三の願力自然である。

必得^ニ超絶^ヲ去^リ 往^シ生^テ安養^ノ国^ニ 横截^シ五^ノ惡趣^ヲ 惡趣^ニ自然^ニ閉^ル 昇^ル道^ニ無^ク窮^ク極^ニ 易^ク往^キ而^シ無^ク人^ヲ 其^ノ国^ニ不^レ逆^テ違^フ 自然^ノ之^レ所^レ牽^ル (『真聖全一』三二頁)

特に親鸞は、この五言八句に注目し詳細な注釈を施している。

「本願の業因にひかれて」「浄土の業因たがわずして」「他力の至心信樂の業因の自然にひくなり」というように、如来の本願を根拠とする必然的なはたらきとしてこの「自然」を理解していることが分かる。つまり、これは三毒五惡段の衆生界にはたらく本願力を象徴しているものと言えるのである。このように「自然」を願力自然と読み取ったところに親鸞の自然理解の独自性があると云えるのだが、その点は、『大經』の代表的な註釈家である階代の慧遠、吉藏、新羅の憬興の説と比較すればなお一層明らかとなる。特に「易往而無人 其国不逆違 自然之所牽」についての三者の註釈を見れば、その中で慧遠と憬興がこの自然を業道自然と理解していることに注目できる。つまり「往き易い」のに、「無人」であるのは、自然に娑婆世界に牽かれて浄土に生まれるための因を修さないからであるとするのである。ここに親鸞が、真実報土に往生させる本願力とする自然理解との大きな懸隔があると言えよう。さらにその願力自然の内実を見ていくときに、この三者の註釈が大きな示唆を与えてくれるのである。三者とも「無人」とは衆生が因を修さないことを原因としている点で共通している。その結果として「自然之所牽」を、衆生を娑婆世界に牽く業道自然のはたらきとする理解が生ずるのである。しかし親鸞

は、この「無人」は「うたがい」が原因であると理解している。つまり信心の問題としてこの教説を見ているのである。よってこの「うたがい」を超えていくようなはたらきとして願力自然を了解していたと見ることができるとはなからうか。親鸞は、「行卷」で憬興の註釈を引く。

又・云・易往而無人・其国不逆違自然之所牽修^ル因^ニ即往^ス・無^ク修^ル生^テ尠^ク修^ル因^ニ来^リ生^テ終^ニ不^レ違^フ逆^テ即^チ易往^ス也、 (『定親全一』五六頁)

ここでは憬興本来の主旨を大きく変えて「易往而無人 其国不逆違 自然之所牽」の全体が「易往」を表すものと読み取っている。さらに続けて憬興の「究竟願故」「因果遂故」という註釈を引くことから推し量れば、願力自然とは具体的には「無人」を包み込んでたらく果遂のはたらきとして了解していたのではなからうかと思われるのである。だからこそ和讃において「定散自力の称名は 果遂のちかいに帰してこそ おしえざれども自然に真如の門に転入する」と、「自然に」転入すると詠うのであろう。このように転入の自覚をあえて「自然に」と言うのは、『大經』の願力自然の意義を正確に読み取っていたからであるといえよう。つまり、業道自然の三毒五惡段にはたらく、畢竟「無人」を象徴している胎生ものを真実報土の化生に転ずるはたらきとして、親鸞は願力自然を了解していたのである。このように『大經』の「自然」の意義を踏まえて、親鸞が「自然」を語ることに充分留意して、親鸞の「自然」を考察していく必要があるのである。